ヒョウのハチ

人に愛され、人とともに生き、人を勇気づけ、そして人に命をうばわれたヒョウの「ハチ」。
剥製になった今も、私たちに大切なことを教えてくれています。

ハチとの出会い

1

昭和16（1941）年２月、中国に派遣されていた
高知出身の隊員を中心とした「鯨部隊（くじらぶたい）」（歩兵第236連隊）の
成岡正久（なるおか まさひさ）さんは、地元の人から、
家畜や人をおそうヒョウを退治してほしいと頼まれます。
ヒョウのいる洞窟に火を放った成岡さんたちは、
生まれたばかりの２頭のヒョウがいるのを見つけたのです。
成岡さんは、この2頭を部隊に連れて帰り、１頭は中国の動物園におくり、
首にやけどをしていたもう１頭を部隊で育てることにしました。

部隊のマスコット、ハチ

2

このヒョウは、成岡さんのいた部隊「第８中隊」から「ハチ」と名付けられ、
部隊の一員として、隊員たちとともに暮らしました。
ハチと遊ぶことで隊員たちは心をいやされ、
ハチがそばにいることで隊員たちは心強く
警備の任務にあたれたといいます。
ハチは部隊のマスコットとして、成岡さんをはじめ、隊員たちにとって、
なくてはならない存在になっていました。

動物園の人気者

3

しかし、突然別れのときはやってきます。
次の大作戦のため、成岡さんたちの部隊は、移動することになったのです。
ハチを連れていくことはできません。
そして、成岡さんの苦心の末、昭和17（1942）年５月、
ハチは東京の上野動物園におくられることになります。
「兵隊が育てたヒョウ」として新聞にとりあげられ、
ハチはたちまち有名になりました。
その後の１年間、
ハチは上野動物園の人気者として人々を楽しませることになります。

ハチの死

4

そして、昭和18（1943）年８月、
上野動物園に猛獣処分の命令が下されます。
戦況の悪化による食糧難と、空爆により逃げ出す危険から、
猛獣を毒殺せよ、という命令です。
ハチと26頭の動物たちが、殺されました。
ハチは、人間の出した毒入りのエサを、何の疑いもなく食べたことでしょう。
ハチは２年６か月という短い生命を閉じました。
成岡さんは、偶然にもこの直後、電報でハチの安否をたずね、
その返信でハチの死を知ることになります。

成岡さんとともに

5

戦争が終わり、高知に戻ってきた成岡さんは、無念の死をとげたハチを
何とか自分のそばにおいてやりたいと思い、
上野動物園にハチの剥製の引きとりを申し出ます。
成岡さんの思いに動かされ、特別な取り計らいにより、
昭和24(1949)年、
ハチは再び成岡さんとともに過ごすことになったのです。
成岡さんは剥製になったハチを
いつもそばにおいて大切にしていたといいます。

高知の子どもたちとともに

6

昭和56（1981）年４月、成岡さんは、２月に開館したばかりの
高知市子ども科学図書館にハチの剥製を寄贈します。
それから30年以上、ハチは、
子ども科学図書館に来る子どもたちとともに過ごすことになります。
成岡さんは、平成６（1994）年６月１日に亡くなりましたが、
その思いは、この後、高知の人々によって受け継がれていくのです。

生まれかわったハチ

剥製になってから60年がたっていたハチは、いたみが激しく、
ハチのことを児童書「戦場の天使」に書いた浜畑賢吉（はまはた けんきち）さんの呼びかけにより、
平成16（2004）年８月、ハチの修復のための募金活動が始まります。
その後、ハチの修復を目指す多くの人々の思いにより、
平成21（2009）年５月、ついにハチは修復されることになり、2か月後、
修復を終え、生まれかわったハチは、子ども科学図書館のシンボルとして、
平成30（2018）年２月12日の閉館まで、
高知市の子どもたちに平和の大切さを伝え続けてきました。

そして未来へ…

8

そして平成30（2018）年７月24日、ハチは、
ここ高知みらい科学館にやってきました。
ハチはたった２年半という短い生命を、戦時中でありながらも
生きものを大切にする心を忘れなかった「人間」とともに生きました。
そして無念にも、その「人間」によって殺されてしまいます。
それからおよそ80年間、ハチは私たちに
「生命」の大切さを教え続けてくれています。
実に、ハチの生命の30倍以上の年月になります。
そしてこれからも、ここ高知みらい科学館で
私たち「人間」の未来を見守ってくれることでしょう。